



Title	<紹介>福田安典著『儒医の文芸』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2026, 126, p. 83-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106106
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

福田安典著『儒医の文芸』

飯 倉 洋 一

「儒医」とは「儒学と医学に通じていた人物のこと」であり、本書では香川修庵と都賀庭鐘を、その具体的人物として中心に据えている。

本書の構成は、以下の通りである。

序 章 儒医についての序説

第一章 医陰の文芸―医事説話の誕生―

第二章 儒医の文芸

第三章 都賀庭鐘雑考

終 章 おわりに

序章では、「儒医」以前の「医陰」という言葉に留意を促す。「医陰」とは「医学と陰陽道をセットにした把握法」であったが、近世になって、儒と医を組み合わせる「儒医」がとって代わるのである。「儒医」の前に「医陰」がある、という歴史的把握が本書の重要な点のひとつである。「儒医」についての早い言及は伊藤仁斎の「儒医弁」である。仁斎は「儒医」をよく言わない。仁斎と同時代の医師たちの言説も「儒医」に批判的である。本書はこの事実をあえて提示した上で出発する。

第一章は、「医陰」に焦点を当てると浮かび上がる医事説話である。医学書は舶来だったが、そこは儒学・医学的側面のみならず、

奇怪な故事も登載された。それらを医事説話と呼ぶ。ここに著者が着目するのは、医事説話が第二章以下の「儒医の文芸」にも流れ込んでいくからである。取り上げられる医学書は、医事説話集の嚆矢たる『医談抄』、「奇病」を抜き出した『奇疾一覧』、「姑獲鳥」を掲載する『本草綱目』、そして医学書と大いに関係する謡曲『脈論』・『仲遠』・『孫思邈』、御伽草子『不老不死』、古浄瑠璃の『しのだづま』らである。孫思邈説話については、庭鐘らへの継承も展望し、狂言『神鳴』や仮名草子『竹斎』を取り上げては、名医伝と藪医譚の問題に至る。名医伝には、医陰の底流が語り継がれていること、道教色があることを述べるなど、叙述の自在な展開について行けなくなりそうである。

第二章は、「儒医一本論」を唱えた香川修庵について述べる。「儒医一本論」とは、儒教の許す書籍だけで治療をすることであるが、修庵は医学書の古籍の信憑性を認めず、「自我作古」を唱えて物議を醸した。洒落本『本草妓要』では彼の『一本堂葉選』がパロディの対象となった。儒学を学んだ古義堂の伊藤仁斎、その子の東涯との関係についても述べられる。戸田旭山との『葉選』『非葉選』論争は、上田秋成・本居宣長の古代論争に波紋を及ぼしたことも指摘され、近世論争史の中で、修庵が重要な位置にあることを明らかにする。一方で、修庵は文芸にも熱心だった。象が舶来した時には『詠象詩』を作り、医人としての集大成である『葉選』の執筆と同じ時期に、伊藤長堅『明詩大観』の校訂のみならず選詩にも加わっていた。『明詩大観』は本書の中でも五本の指に入るの

ではないかと思われる重要文獻。まさに「儒医の文芸」を象徴する本であろう。

第三章は、著者が長年研究対象としてきた都賀庭鐘。医学は香川修庵門だが、儒学の師系が明らかでなく、厳密には儒医と称し
たいが、世間的には儒医と見なされていたので、儒医的存在として取り上げることである。『垣根草』の作者について、近年劉非非によって復活した庭鐘作説を批判する。この中で著者所蔵本の外題簽が「古今奇談」という角書を持つことを紹介しているが、初出の雑誌では図版があったのに、本書では割愛されているのが残念である。著者は医学の観点から庭鐘作とはなりえないことを主張しているが、なお決着がついたとまでは言えず、今後の議論に期待したい。庭鐘の医学については、その読書ノートである『過目抄』に、庭鐘が大坂を出て、京都の一本堂を訪れたことが記録されていることから、修庵の門人であることがわかるとい
う。しかし、医学者としての事蹟は数少ない。そのため、庭鐘を師と仰ぐ上田秋成との関係も杳として
いる。果たして秋成は、庭鐘から白話を習ったのか、医学を学んだのか。その両方だ
うのは「やや乱暴」と著者はいうが、秋成が「先生」と仰いだのが、他に国学の加藤宇万伎、儒学の五井蘭洲のみであることから、両方を学んだという推測も無理ではないだろう。著者は、医学に
関しては庭鐘に学んだ公算が高いとしている。

それにしても儒医の研究自体が少ない上に、儒医の文芸となると、もはや著者以外にこれを研究している人はいないのではない

か。本書は、医陰という、聞き馴れないカテゴリーを儒医以前に置き、儒医の文芸を歴史的に構想することを試みた挑戦的な研究書である。それかあらぬか、著者特有の「語り（文体）」が時折顔を覗かせる。著者の専門である「平賀源内」の「平賀ばり」に因んで、これを「福田ばり」と称しておこう。例えば次のような箇所である。

○しかしながら、ここに一つの陥穽がある。現在の日本文学研究は純度と完成度を高めるあまり、いわゆる文学研究に「使える」史料についての視野が狭くなっているのではないだろうか。

（68頁）

○この古代回帰という単純で甘美な理念は人畜無害の人文科学では可能であっても、人命に直結する医学の領域では問題がある。

（135頁）

○その発想には、上方は才能払底の地であって、洒落た作品が書けるのは秋成だけだとする無意識の上方蔑視があるのではないだろうか。（249頁）

まさに源内がそう呼ばれたところの「憤^じ激^れ」の文章である。しかしながら「自棄^{わざくれ}」ではない。「福田ばり」は、むしろ自負の文章だといえよう。

（汲古書院、二〇二五年九月、三六〇頁、九、〇〇〇円＋税）

（いいくら・よういち 本学名誉教授）